就職とは……
窓口の眼から

法学部・経済学部　　厚生補導係

最初に

広大フォーラム21期4号で，就職特集号を企画するにあたり，「就職選択にあらわれた広大生気質」あるいは，「就職相談における日頃の苦労話」等について，何かお願いできないであろうかと原稿の依頼があり，お受けしてしまったが，さて，一口に広大生気質といっても各学部の特異性の中で，それぞれに学ぶ各学部の学生気質を，たかだか法学部・経済学部二学部の学生気質を語ることによって果たして，広大生気質といってよいかどうか……はたまた，日頃の苦労話といっても，大半の学生達は係の手をそれほど煩わすこともなく，自由応募制の中，自らの力量を遺憾なく発揮して各官公庁へ，あるいは，各業界の一流どころへと進路を定めているといったところが実情といえる。そこで，広報委員会から求められている意図とは若干異なるかもしれないが，法学部・経済学部厚生補導係が，日頃対応していることの一端と，それらをとおして印象に残っていることなどを紹介しながら，この依頼の回答にさせていただきたいと思います。

就職ガイダンス

現在年三回程度行っており，4月の履修手続き終了後に第一回目を実施している。内容は就職活動に際しての基本的な心構えを中心に「就職の手引」（法学部・経済学部独自の就職に関する指導並びに情報を掲載した冊子）の配布，及び，事務手続きとして，「就職希望調書」を提出させているが，この調書は就職に対する現時点での考え方，セールスポイント，自分の性格，卒業後の希望等（方針希望業種，希望職種……）など30項目以上からなる調書で，一つ一つ考えて記入させるようにしており，これから就職活動を開始する学生達に，自己を見つめさせるものとしても活用している。

二回目は夏季休業前に行っており，その年その年の水面下における企業の動向を捉えて，なるべく詳細な情報を学生達に伝達するようにしている。特に，この時期はさまざまな情報の飛び交う中で，焦燥感に駆られた学生達の不安な気持ちを少しでも和らげてやるよう心がけるとともに本格的な就職戦線に立ち向かって行く学生達にとって，励ましになるものとしている。

三回目は10月中旬に行っているが，民間企業志望の学生達はすでに内定を得ており，公務員志望の学生達にとっても一部を除いて，そのほとんどは各官公庁の合格者名簿に登載されて，ほっとした時期でもある。それだけに気の緩みから交通事故，あるいは，健康を害すことのないように注意をあたえ，履修単位の確認を行わせ未修得単位があれば，後期の履修手続きにおいて，遺漏のないように行うよう指導している。事務手続きとしては，就職試験報告書及び，アンケートを提出させて，次年度生に配布する「就職の手引」作成のための参考資料にしているが，特に，就職試験報告書は，その年その年に就職活動を展開した学生達が実感をこめて記載したものであり，私達，厚生補導係員が百の言葉を並べるより説得力のあるものとして活用させている。

就職面談

前記の就職ガイダンスが総論であるとするなら，就職面談はさしずめ各論ともいえるもので，提出させた就職希望調書を基に行っている。以前は個人面談という形式をとっていたが，ここ数年来は1日4コマ（1コマ＝約1時間程度）を設定して，5人から10人を1グループとして，グループ面談形式をとっている。5月の連休明けから5月いっぱいにかけて公務員志望者を対象に公務員試験受験のための用意，心構え，諸注意等を行い，6月上旬から中旬にかけて，民間企業志望者を対象に，リクルーターへの対応の仕方，あるいは，セミナーに参加する際の注意事項等を詳細にわたり説明し，また，質疑応答している。

グループ面談終了後は，個々の面談に切り替えて，学生達の相談に随時応じている。特に7月上旬から9月下旬にかける3か月間は，面談を求めてくる学生達によって，1日の大半は占められる。

面談をとおして

「A社とB社から内定を得ました。果たして自分は，どちらを選択したらよいでしょうか」年に何度か，こんな贅沢な（？）相談を受けます。

しかし，私達は，その問いには答えないことにしています。なぜなら，もう一度根本から自分自身を見つめなおして，自らの力によって結論を出してほしいからです。

正直いって，ここ数年来の景気の動向からいえば，法学部・経済学部で，ごく普通に勉強して，ごく普通に卒業して行こうとする学生であるなら，希望，あるいは，ほぼ希望に近いところの企業が，広島大学の法学部生・経済学部生ということで内定をくれます。しかし，肝心なことは，自分自身がどちらに向いているかということなのです。それは，取りも直さず，大学4年間という大学生活において，一体何をしてきたのか。何を考えて過ごしてきたのかということなのです。この21期4号のフォーラムが発行される頃は，民間企業志望者の大半の人達は結論に近いところに達していることと思います。しかし，あえて次年度生のためにここを強調しておきます。

「自分は一体何のために大学に入ってきたのか」と。これは決して就職のためだけにいっているのではありません。自らに問いをもって，自らを磨いてほしいと思うからです。

印象に残るA君のことなど

厚生補導係の窓口では，就職活動の時節到来と同時に就職試験報告書（OB達の就職活動体験記を各分野ごとにファイルしたもの）を設置し，学生達に閲覧させているが，これをA君という一人の学生がしきりに閲覧に来ていた。そして，時には相談を求めてきた。彼は公務員志望で広島市役所が第一志望であった。前年度，就職試験を受験したが，不振に終わったため，卒業要件の単位を意図的に残して残留し，公務員試験のための勉強をしていた。その直向なまでの姿勢に魅かれ，ある時，こちらから「A君はどうして，そうまでして広島市役所に入りたいのか」と質問をしてみた。すると彼は「自分の家は可部町の奥の方です。大学4年間，国道54号線をバスに乗って通学して来ましたが，その渋滞には，ほとほと悩まされました。だから自分は広島市役所に入り交通行政に取り組んで，広島の交通事情が少しでも改善できるように努

力してみたいのです。」と答えた。

その言葉は，私達の方が逆に教わるものを含んだ言葉でもあった。彼は難関な広島市役所の試験を突破して，現在は安佐南区役所で道路管理という業務に携わりながら，学生時代に描いていた夢に向かって，一歩一歩着実に歩んでいる様子です。

毎年，法学部・経済学部の学生数百名と接しながら，その一人一人を見つめるとき，公務員志望，あるいは，民間企業志望の違いはあっても，そこには青年らしい学生達一人一人の夢が存在することに気がつかされます。就職面談という学生達の就職相談を受けながら，切々と話す彼らの不安な気持ちの向こう側にあるものの裏をかえせば，それは彼らの夢であり希望の光なのです。その夢と光の中に邁進して行く彼らを私達はどこまでも信じて応援してやりたいと思います。

最　後　に

法学部・経済学部厚生補導係には，諸先輩達が築き上げてくれた就職指導の伝統があります。それは，学生達にとって，明るく親しみのある窓口であることです。気軽に窓口においで下さい。一緒に考えましょう。

また，1987年広島大学保健管理センター心理相談室編「心理相談の手引」第二編第三章に，現総合科学部学務第二係の笹田康史氏が「厚生補導窓口における学生相談――就職指導を中心にして――」を述べておられますので，併せて参考にしていただきたいと思います。